

たより

『美紗の会』 ニュース

第十四号

平成七年一月三十日

発行者
「美紗の会」事務局
☎ 03-3441-2726

本年上期活動計画

三度目のアマースト訪問も

会主の平成七年上半期の予定が決った。

一月四日、こととして十一回目を数えることになった恒例の美紗の会「おひきぞめ」が皮切り。次いでこれもまた日米文化交流の大きな実績となっているアマースト大学訪問公演も今年で三回を数えることになり、加えてマサチューセッツでの放送、イェール大

学公演など国外での活動もいよいよ盛んになり楽しみだ。また「華の会」を初めとする定例の会に加わって「ジャンソンと小唄の夕べ」などという新しい試みにも果敢に取り組みたいとする会主の心意気に大いに期待し応援したい。

公演のスケージュールは次の通り。

平成七年年頭にあって

会主 橋場 はつえ

平成七年の年の朝は眩いばかりの光に溢れていました。毎年、私には歩むべき道がある。と幸せをかみしめるのですが、今年も元旦に参拝した明治神宮のおみくじが奇しくも明治天皇がお作りになった「道」という和歌で「人々に遅れても自分が目指した道をしつくりときわめて行くように」という文がしたためてありま

した。私は自分が志した道のお陰で、素晴らしい師に恵まれ、色々な方々と親しい時間を持つことが出来、少しずつも前進できる日々を嬉しく思っております。どうぞ今年もゆつたり、じっくり、にっこりと心豊かに皆様と共に精進して参りたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

* 二月四日(土) 午後一時

第十一回「美紗の会」

白金台福祉会館

* 二月二十三日(木) 午後六時

「ジャンソンと小唄の夕べ」

神田・新開化

* 二月二十四日(金) 午後八時

「邦楽のひとつとき」
ロンコンサート

鎌倉・万寿庵

* 三月二十日(四月十日)

アメリカ公演(予定)

(アマースト大学)

☆ エスニックミュージック概論の授業

☆ インドと日本のエロス研究の授業

☆ 日本文学と歴史の授業

業

(マサチューセッツ地方放送局出演)

☆ シルクソールテープ

発売記念

(イェール大学)

☆ コンクリートポエム

詩人学会・客演

小唄ちよつといい話(一)

六じゆう六

もともと四畳半で密やかに唄っていた小唄が、料亭や風俗など時代環境の変化で、お座敷が失われてからは、おさらい会や発表会などの舞台小唄で何とか生き延びている。舞台などで唄うようになつてから、とかく長い唄が唄われる傾向になった。そう言え

のが普通で、これが小唄の世界を益々狭くし、陳腐にする結果になつている。幸にして「美紗の会」はそんな行き方とはちよつと違うニュアンスなのでよかつたと思うのである。

「私自身でも、どうせ舞台上に上つたからには、たつぷり唄いたいし、聴かせもしたいという気分になつてしまふのは共通の心理だろう。しかし師匠の主権するおさらい会は、劇場から並の会場等まで規模はまちまちだが、大体〇〇派という系列の傘のもとで慣習的に行われている

まあそれは余談として、例え時代や場所が変わろうとも、小唄らしい洒落た本来の持ち味だけはとっておきたい。失いたくない。その意味からは短い小唄に、小唄本来の味がよく残されている酒脱な唄が沢山あると思う。土屋健先生が言っている。もし長い唄を唄うのなら、そのあとせめて短いのを一つやつて貰うと、沁みじみ唄を

聴いた気がするし、長い唄までかえって生きる、と。小唄は唄うことはもとより楽しいが、その詞だけでも含蓄があつて味々と面白い。人生観あり、色恋もあり、そして皮肉な洒落もある。全く人生はそんな小唄で送りたいものだ。

勿論唄に説明は野暮と知るけれど、私の感想を交えながら幾つか、うまい形容や表現と感心する小唄をあげてみる。青柳のかげに誰やらいるわいな 人じゃござせぬ おぼろ月夜の影法師

尾花は露と寝ぬという あれ寝たという寝ぬという 尾花が穂に出てあらはれた
△のびあがりのびあがり見
(次頁五段目へ)

* 四月二十日(木) 午後六時

紫穂里の会

「語り唄でつづる下町情話」(企画・出演)

蔵前江戸史料館ホール

* 四月二十九日(五月一日)

福岡公演(参加予定)

* 六月三日(土)

山脇学園同窓会・演奏

目黒雅叙園

* 六月二十二日(木)

華の会・舞の会

(地方出演)

国立劇場・小劇場

新入会員紹介

照沼太佳子

バルコ出版の編集の仕事をしてきたが、現在はアカンパニーカンパニーを設立し、各種イベントのプロデュースやグラフィックデザイン、アートのコーディネートターの仕事をしている。昨年福岡での日本文化デザイン会議フォーラムで会主の唄を聴き、感動し即座に入門を決意したという。静かな情熱を秘めたキヤリヤウマンです。「茨城県水戸市出身」

日比野充希子

現在活躍している日比野克彦氏の妹さん。多摩美大グラフィック科を卒業後、東京芸大の大学院に学び、現在はフリーの造形作家として、家具のデザインや、舞台美術などの仕事で活躍している。表千家の茶道の稽古もしており、日本芸術に関心を持っていたところ、福岡での会主の芸に魅せられ、忙しい合間を縫って毎朝三味線の稽古をしているというユニークな現代女性です。「岐阜県岐阜市出身」

『美紗の会』 会員訪問

川辺 紀恵さん

私、昔染五郎の追っかけやっていたんです

美紗の会の女性陣には「剛の者」が多い、と言った人がいる。辞書によれば「剛の者」とは「すぐれて強い人」と男性に対する言葉であって、女性にはいささか失礼なような気もするが、転じて「傑物」と他に抜きん出て優れている人に対する賛辞でもあるようなので、女性が強くなったと言うか、むしろ社会的活動で男女の差を殊更に言うことさえ少なくなりつつある今日では男女差別語ではないのだと勝手に解釈して、美紗の会の心優しい女性方にお許し頂くことにしよう。

と又、ここまで読んだ読者の中からは「エーッ」と言った声が出てきそうなのも不思議だ。(何だか今回はエライ人のことを書くことになったな)

仕事のことを聞いたら、小金井自動車工業の代表取締役の他、不動産関係の会社の経営など女性経営者として活躍をしているそう。

今回は最初からこんな言葉を出してしまつて、皆さんに川辺さんが剛の者であるような印象を与えては申し訳ないが、川辺さんをご見るかは読者の見方にお任せするとしても、公平に言つて川辺さんが美紗の会の中での傑物であることには誰も異論を差し挟まないだろう。

きつと、今密かに声を出したのは、川辺さんと一緒にお酒を飲んだことのある人、川辺さんに彼女が重役をしている会社のことを聞いた人、彼女が運転手付きのベンツに乗っているのを見た人、そして川辺さんに「今日は私がご馳走してあげるから随いていらつしやい」と言われ、気前の良い姉御肌を感じしながらご馳走になった人達だろう。

でも、そんなことを話す時でも「父の残した仕事を、母を助けながらやっているだけなの」と少しも偉ぶる様子もなく淡々と話す。こんな人がいる会社で働らいている従業員は幸せだな、と思わせるような経営者だ。

と、何かえらい豪速球を投げなければいけなくなりそうになってしまったが、本当の川辺さんは大好きな父上の事を「お父ちゃん」と呼ぶ可愛

いお嬢ちゃんがそのまま育つたような天真爛漫、愛すべきところがある人で、今はご主人と子供さんのことを話すのが大好きな育ちの良い奥様なのだ。

歌舞伎についても「若い頃は染五郎の追っかけだった」と言つて憚らない熱烈なファンで、そんな背景が彼女の芸の上にも影響を及ぼしているのではないかと思う。

と、何かえらい豪速球を投げなければいけなくなりそうになってしまったが、本当の川辺さんは大好きな父上の事を「お父ちゃん」と呼ぶ可愛

でも、そんなことを話す時でも「父の残した仕事を、母を助けながらやっているだけなの」と少しも偉ぶる様子もなく淡々と話す。こんな人がいる会社で働らいている従業員は幸せだな、と思わせるような経営者だ。

でも、そんなことを話す時でも「父の残した仕事を、母を助けながらやっているだけなの」と少しも偉ぶる様子もなく淡々と話す。こんな人がいる会社で働らいている従業員は幸せだな、と思わせるような経営者だ。

と、何かえらい豪速球を投げなければいけなくなりそうになってしまったが、本当の川辺さんは大好きな父上の事を「お父ちゃん」と呼ぶ可愛

でも、そんなことを話す時でも「父の残した仕事を、母を助けながらやっているだけなの」と少しも偉ぶる様子もなく淡々と話す。こんな人がいる会社で働らいている従業員は幸せだな、と思わせるような経営者だ。

でも、そんなことを話す時でも「父の残した仕事を、母を助けながらやっているだけなの」と少しも偉ぶる様子もなく淡々と話す。こんな人がいる会社で働らいている従業員は幸せだな、と思わせるような経営者だ。

歌舞伎についても「若い頃は染五郎の追っかけだった」と言つて憚らない熱烈なファンで、そんな背景が彼女の芸の上にも影響を及ぼしているのではないかと思う。

自分も舞台に立つ時は熱達の風情で、少しも動ずる様子がなく安心して聴かせてくれる。中学時代からの友人が師匠の同級生だった縁で師匠の門下に入ったが、稽古を始めた動機を「声が大きいのので、この大声を生かせられないかと思つて」と話すあたりいかにも川辺さんらしくて良い。

そんな彼女の好きな唄は『稽古さび』『文月』『うそとまこと』。そして聴くものなら「師匠の唄う地唄はすべて好き」と言い切る。

邦楽の効用について「気分転換と息抜きになるんです」と社会的責任を果しながら同時に良い妻、母として立派に生きていくキャリアウーマン兼主婦の生活で、趣味が重要な役目を果たしていることを語ってくれた。

しかし稽古の段に及ぶと「練習は稽古の日に少しだけ。お稽古に行つて帰つてくると安心して忘れてしまします」と、正直な、いかにも川辺さんらしい回答。これが平均的会員の偽らざるところではないのだろうか。でも「柴

しみながらの唄」をモットーとする会主にとつてはそれで十分であり嬉しい返事なのだろう。

事実川辺さんも美紗の会について「とても楽しい会です」と語っているし、では会に入つて具体的に何が良かったかと聞くと「先ず第一に沢山の交友ができた事、日本語をより多く理解できるようになったこと」と前半は会主の喜びそうな答えで、そして直ぐに川辺式ウィットに富んだ主張が続く、要はこういう返事がすらすら出てくる人の脳は若々しく柔軟で、常に若い世代と歩んで行ける人ではないのだろうか。

最後に彼女から会員の皆さんへのメッセージ。
「美紗の会のお仲間に入れていただけて大変嬉しく思っています。ステキな師匠にはステキな弟子が集まるものですね。世間知らずの私にとつて、色々な年齢の様々な分野で活躍の皆様から教えられることが沢山あります。これからもよろしくお願いします」

（一頁下段より続き）
れば見えぬうしろ影 まぢれたいと思わずかみ切るつま楊子

この間接的で仄かなところが素敵である。淡い気持の顯れが叙情的にいいはありませんか。

私の好きな芝居情緒にもいい小唄がある。
〆何事もいわぬが花の山吹や 昔ながらの黄八丈 拾兩に五兩で十五兩 もらう鯉が半身さえ 名も入れ墨の藍あがり

江戸の風がわたるようよくな気分ですが、ではもう一つ
〆半染めのぬれ手拭いや梅の花 (五代目菊五郎)
それでは私が好きでよく唄つた短い小唄を二題。

〆涼しげに水の音する柳かげ 月にかくれて飛ぶほたる
〆うっかりと言つたひと言 そのひと言がなせにこんな気にかかる 羅宇やきせるの笛の声 (久保田万太郎)

気分がよくつたところだとびきりの江戸前を。
〆左り新橋右すきや橋 そぞろ心を柳に問えば 柳やなよなよ左へなびく たそがれ銀座の四丁目

〆ほどほどに色気もあつて品がよくさりとて冷たくない人に逢つてみたいよな春の宵 私の全くの駄作
〆芝浜の夢かき消えて提灯赤く 水面にうつして行き交う湾(うみ)の屋形船

〆思いをかける虹の橋 ビームは流れる 気もはしやくピルの隙間を吹く風に アレ騒がしいジュリアナか

(血液型O型、星座・射手座・慶応義塾大学卒・東京都出身)「文責・齋藤」